みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

中華街からみえる日本社会

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 天璽 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5251

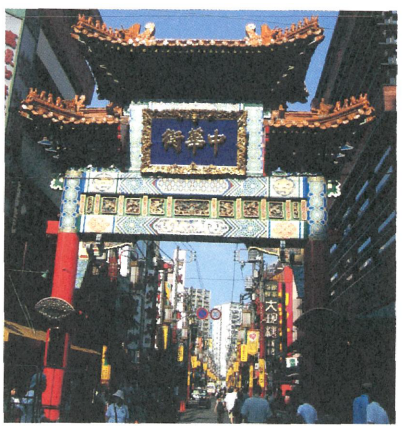
中華街からみえる日本社会

陳　天璽　ちんてんじ

絵葉書「中華街南門通り」。
横浜中華街の本村通り（現在の南門シルクロード通り）、20世紀初頭の様子。元街や山手居留地に通じる道であったため、欧米人の生活に関連した店がおおかった。料理店「東坡楼」のほかは、おおくは英文で書かれている看板からもその様子が伺える。
このころすでに日本では多民族が共生していたといえよう。写真提供・横浜開港資料館

蒸籠（セイロ）からこぼれる白い湯気と食欲をそそるほのかな香り。「おいしいよ。肉マンいかがですか」と中国なまりの日本語で一所懸命客引きをする声が耳に響く。目に飛びこんでくる派手な赤や金の牌楼（パイロー、門）と建築、そしてそれらに装飾されている手の凝った龍や珍獣たち。そんな異国情緒あふれる中華街は、日本人にとって身近な「外国」である。おいしい中華料理をもとめて、年間1800万の人びとが横浜中華街を訪れる。東京ディズニーランドなどのテーマパークに負けない集客力をもっている。

日本にある中華街の特徴は、観光化が進んでいることだ。世界のチャイナタウンのおおくは、消費者の大半がコミュニティにくらす人びと、つまり現地の華僑華人であるのに対し、日本のチャイナタウンの消費者の9割は日本人である。横浜中華街とよばれる、およそ500メートル四方の敷地内に立ち並ぶ500店舗のうちの約半数が中華料理店。街を訪れる人びとの目的はもっぱら食べ物。メディアが取りあげる中華街も料理に関するものがおおい。日本ではデパートのレストラン街を中華料理に特化して「中華街」と称するほど、食べもののイメージが先行している。

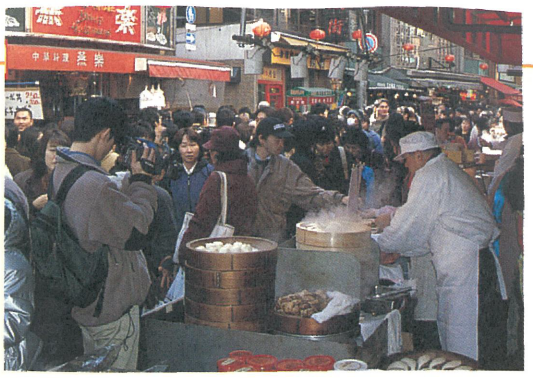


横浜中華街の正門。「善隣門（ぜんりんもん）」。中華街にくらす華僑、そして日本人など隣人たちが仁愛の念をもって仲良く、ともに発展するようにと祈念され、門には親仁善隣と書かれている。今ではこの他に9基の門（牌楼パイロウ）が建てられ、色や彫刻などそれぞれ風水の思想をもとにデザインされている

中国人はたしかに食べるのが好きだ。でも中華街＝食べ物。中華街の形成＝華僑とするのは少々短絡的すぎる。中華街になぜ料理店がおおいのか。なぜ神戸の南京町には食べ歩きをさせる出店が増えたのか。その理由はじつは日本社会と深くかかわっている。一本裏道を歩いたり、街にくらす人びとを眺めたり、その歴史をたどってみると、さまざまな姿をした中華街がみえてくる。それは日本の素顔をみることにもつながる。

中華街の歴史は1859年、日本とアメリカのあいだに結ばれた日米修好条約による日本開港からはじまる。江戸幕府は、外国人に一定の区域内での居住、商業活動を認め「居留地」を設けた。欧米商人は日本人との交易の際すでに広東、上海などの国際市場で商売仲間だった中国人を同行させた。中国人は漢字によって日本人と筆談できたため、欧米人と日本人の意思疎通に必要不可欠な仲介者であった。交易の拡大にともなって中国人は増加し、居留地には関帝を祀る廟や劇場など、華僑たちが集う場ができた。それがいまの中華街の原型となった。

1899年、居留地が撤廃されると、日本人のあいだで中国人との「内地雑居」を危惧する声がでた。中国人労働者の来日により日本人の失業を恐れ、職業制限が設けられた。中国人が従事できる仕事は「三把刀（サンパトウ、刃物をつかう三つの業種＝洋裁、理髪、料理など）」にかぎられた。未熟練労働者は規制された。けっきょく、毎日に必要である食に関連した料理業が生き残った。



神戸南京町の出店。阪神淡路大震災以降、出店が増えた。華僑が出す、暖かい中華風の救済食は震災時、民族を問わずおおくの被災者を元気づけた。今では南京町の週末には欠かせない目玉商品だ

中華街での食べ歩きはおおくの来街者の楽しみのひとつだ。神戸南京町の出店はとくににぎやかな雰囲気を演出している。しかし、中国人は本来食べ歩きをする習慣はないし、南京町に出店が増えたのも、阪神淡路大震災以降のことだ。震災の救済食をみんなでわけあって食べた名残だ。震災当時、暖かい中華料理は民族を問わず、多くの被災者を元気づけた。

中華街の形成とあり方をのぞきこむと、その奥にみえてくるのは日本社会で模索してきた華僑たちの生き様であり、日本の姿でもある。多文化・多民族共生が近年いわれているが、その原型となるものはじつは150年近く前にすでに中華街ではじまっていた。あの街を、身近な「外国」とするか、日本の「多様性」とするか、街で食べ歩きをしながら考えるのもまた味わい深いかもしれない。